

ロマ 11 におけるユダヤ人とキリスト教徒の関係 ——パウロの教えに見るロマ 11, 1-36 の社会的, 神学的意味——

Relation between the jews and the christian according to
Paul's teaching in Rom11
sociological and theological meaning of the Rom 11, 1-36

Janusz KUCICKI

要 旨

本論はロマ 11, 1-36 におけるパウロの教えに関するものである。この手紙の構成とそれぞれの部分の分析は、11 章が新しいイスラエル（キリスト教徒）とイスラエル（イエスを拒否するユダヤ人）との関係を示す教えを含んでいることを表わしている。それはロマ 11, 1-36 を、キリスト教徒の共同体がクラウディウスの法令後に自分達を見出したという特別な状況の社会的, 神学的な解釈を考えるという意味で、特に重要なものになっている。ロマ 11, 1-36 では、一部のイスラエル人がメシアとしてのイエスを拒絶しているが、それでも彼らは選ばれた民のままであると、パウロは論証している。彼らの一時的な失敗は神の救いの計画の一部と見られている。なぜなら、そのことが異邦人にイエスへの信仰を通して神との契約に入らせることを可能にしているからである。

本研究の分析と議論への理解を助けるため、初めに本論文の構成を示す。

1. はじめに
2. ロマ 9-11 の背景と構成
 - 2.1. ロマ 1-16 全体の構成
 - 2.2. ロマ 1, 8-11, 36 の全体的な構成
 - 2.3. ロマ 9-11 の構成
 - 2.3.1. ロマ 9-11 の内容
 - 2.3.2. ロマ 11 の構成
3. ロマ 11, 1-36 の分析
 - 3.1. ロマ 11, 1-10 の分析
 - 3.2. ロマ 11, 11-24 の分析
 - 3.3. ロマ 11, 25-36 の分析
4. ロマ 11, 1-36 の社会的, 神学的帰結

1. はじめに

ローマの信徒への手紙は、キリスト教徒の規範である新約聖書において特別な位置を占める。それはパウロの手紙の中で最初のものであるというだけでなく、新約聖書に含まれるすべての手紙の中で最初のものとして提示される。その理由は、年表上のことや言語的なことではなく、神学的かつ教義的な本質による。最も重要な教義的教えは、信仰による救いに関するものであり、それは罪人に、イエスを通して神から自由に与えられる。しかし、それがこの手紙の唯一の重要な教義ではない。その他にも、行いによって救われることの不可能性（ロマ 1, 16-3, 20）、信仰による救いの重要性（ロマ 5, 1-8, 39）、キリスト後のイスラエル（ロマ 9, 1-11）のような教えが、キリスト教的生活に関すること（ロマ 12, 13, 14）やその他のいくつかの特別な教え（ロマ 14, 1-15, 13）のような神学的な教えと共にあり、それらはパウロがこれから訪れようとしている共同体への自己紹介（ロマ 1, 8-15; 15, 22-29）を越えて、手紙を書く理由を表わしている。手紙の書き出しと書き終わりの部分には手紙を書く理由としてローマ訪問の予定が明確に示されているが、手紙の内容はほとんどこの目的に触れていない¹⁾。少しの例外はあるものの、教義的な章（ロマ 1-11）のテーマはほとんどがユダヤ人に関係している²⁾。しかし、テーマの提示は特定の性質というよりはむしろ一般的である。ユダヤ人（全体）と非ユダヤ人（ローマに住むユダヤ人）は教えの発信者であるが、その教えの主題は彼らにも当てはまる。ロマ 2, 1-3, 20 のトピックは、誰も律法を完全に獲得することはできないことから、律法の行いによって義とされることは不可能であるというものである。ロマ 3, 21-4, 25 の主題は信仰による義であり、ここではアブラハムのことが主な議論として提示されている。ロマ 5, 1-8, 39 は、信仰によって義とされた人々の現実に関する部分である。ここでの主題は、信仰によって義とされた後の律法の役割についての説明を聞く必要があるユダヤ人を含む、救い主イエスを信じる人々に関するものである。ロマ (9, 1-11, 36) は救い主としてイエスを信じる人々（キリスト教徒）とイエスを救い主と認めない人々との関係に関する節である。これらはイエスを救い主と認めないイスラエルの民の現状という主題であるがゆえに、弁解的な特徴を持つ³⁾。この部分の最後の章（ロマ 11）が本論のテーマであり、それはロマ 9, 1-11, 36 が以下に示すような一般的分析の対象となっているからである。

2. ロマ 9-11 の背景と構成

本論の主題（ロマ 11）は、多くの論理的かつ精密に配置されたこの手紙の要素の一つであり、この文書の構造を形作っている。パウロがこの手紙の主要な話題を提示したその連続性に注目する

1) Witherington はパウロがローマの信徒へ教えと助言を与えることを望んでいたと述べている。

B. Witherington III, *Paul's Letter to the Romans. A Socio-Rhetorical Commentary*, Grand Rapids/Cambridge 2004, p. 41.

2) ローマの信徒への手紙の一般的な構造については E. W. Deibler, *A Semantic and Structural Analysis of Romans*, Dallas 1998, p. 23. を参照のこと。

3) C. K. Barrett, *The Epistle to the Romans*, London 1962, pp. 207-211.

ために、先に全般的なものから見て、主要な関心事である特別なものまで、この書簡の構成を分析する。

2.1. ローマ信徒への手紙全体の構成

ローマの信徒への手紙は三つの要素から成る。一つ目の要素は手紙の書き出し（ロマ 1, 1-7）であり、二つ目は書簡の本文（ロマ 1, 8-15, 33）で、三つ目は結びの言葉（ロマ 16, 1-27）である⁴⁾。書簡の本文はロマ 1, 8-11, 36 の教義的な部分とロマ 12, 1-15, 33 の勧告の形をとる社会道徳的な部分から構成される⁵⁾。本文の二番目の部分は、ユダヤ人と異邦人から成るローマの共同体の宗教的慣習を統一することに関する教えに始まるが（ロマ 12, 1-21）、それは真の礼拝と兄弟愛のもとに行われなければならない。ロマ 12, 1-8 は真のキリスト教的共同体のアイデンティティを理解させることに集中している。ここではキリストの体を共同体のイメージにたとえ、信者達が互いに与え合う態度の重要性を強調している。ロマ 12, 9-21 は、共同体内の関係に関する教えで、兄弟愛の実践的な意味に注意を向けている。次はロマ 13, 1-14 の短い断章が続く、それらはローマに存在する共同体の社会的背景を表わしている。初めの社会的義務は、地方の権威者に対する従順と社会的な務めの共有である（ロマ 13, 1-7）。二番目の社会的義務は他者の権利の尊重で、それは隣人を愛するというキリスト教的義務を正しく理解することから生じる（ロマ 13, 8-10）。三番目の社会的義務は、キリスト教的生活に反する社会的習慣や行いを継続しないことである（ロマ 13, 11-14）。次の断章（ロマ 14, 1-23）は、異邦人とユダヤ人から成る共同体の中での特有の問題に関するものであり、それは不浄な食べ物のことを指す。使 10-11; ガラ 2, 11-14 でも述べられる、この論争のもととなる主題は、ユダヤ人と異邦人から成る共同体においては非常に問題となる論点である。なぜなら、このことは両方のグループの共存、すなわち同じテーブルを囲むことを難しくするからである。パウロによれば、とにかくこの問題を、お互いを裁く理由にしていけないのである（ロマ 14, 1-12）。この問題を避けるためには、皆がそれぞれ自分の信念と習慣にばかり注意を払うのではなく、むしろ兄弟にとって何が良いことなのかを初めに考えるべきである（ロマ 14, 13-23）。最後の断章（ロマ 15, 1-13）は、ローマの共同体が一つの声で神を賛美するためにお互い同じ心になるという、パウロの希望についてのものである。これらの表現は、明らかに共同体がクラウディウスの法令後の時代においてユダヤ人と異邦人が共存することの問題に苦しんでいることを示している（ロマ 15, 7）。この断章はパウロのローマ訪問の希望を再度述べることで終わっており（ロマ 15, 22-33）、パウロの宣教の成果を伝えることによって統括されている（ロマ 15, 14-21）。

概要：社会道徳的な部分（ロマ 12, 1-15, 33）は、共同体内の平和的な共存を最も妨げるであろうその共同体特有でかつ実質的な問題に焦点を当てることで、ユダヤ人のキリスト教徒と異邦人のキリスト教徒間のキリスト教共同体における関係性に強く注意を払っている。

4) ローマの信徒への手紙における統一性の問題については T. R. Schreiner, *Romans*, ECNT, Grand Rapids 1998, pp. 5-10. を参照のこと。

5) ロマ 1, 8-11, 36 は本論の次のポイントとして分析する主題となるので、ここではロマ 1, 8-11, 36 の分析を行わない。
ロマ 16 の宛先（16 章はローマの教会のことを意味するのか）に関しては L. Morris, *The Epistle to the Romans*, Grand Rapids/Cambridge 1988, pp. 24-31. Concerning thematic structure of Rom 12, 1-15, 33, confirm: E. W. Deibler, *A Semantic and Structural Analysis of Romans*, pp. 280-359. を参照のこと。

2.2. ロマ 1, 8-11, 36 の全体的な構成

この手紙の本体は交差配列法の構造 (A-B-C-B¹-A¹) になっており、明らかに信仰による義 (C) がこの部分と全体の主要なトピックであることを示している。

手紙本文の交差配列法の構造において、A がロマ 1, 8-15 で、パウロのローマ共同体への訪問計画を述べている。A に対応するのが A¹ のロマ 15, 14-33 で、同じ話題、すなわちパウロのローマ訪問の希望を表わしている⁶⁾。

交差配列法の B はロマ 1, 16-3, 20 で、救済者であり贖い主であるイエスに対する信仰の喜びの外にあるユダヤ人と異邦人双方の状況について言及したものである。その一般的な言明は、イエスの恵みの外に生きる人間は罪の奴隷であるということである。それは、ユダヤ人的な視点で言う、唯一の神と契約をしていない異邦人 (ロマ 1, 18-32) だけではなく、律法を持ち、神との契約のしるしがあるにもかかわらず信仰を持ち続けられなかったユダヤ人をも指す (2, 1-3, 20)⁷⁾。ここで特に焦点を当てているのは、自身の罪深さを認められず、自分達が信心深いアブラハムの息子であるとしているユダヤ人である。B はロマ 9, 1-11, 36 の B¹ に対応している。この断章の主要なトピックは、イエスの恵みを受け入れず、イエスとの新しい契約の外に自らを置いたユダヤ人の状況である⁸⁾。イスラエルの民が神の義を正しく認識できない時にあっても (ロマ 10)、神とイスラエルとの契約は有効である (ロマ 9)。なぜなら、すべてのユダヤ人がつまずいたわけではないし、またそのつまずきが異邦人の繁栄のために役に立っているからである (ロマ 11)。

この手紙本文の交差配列法の構造における C にあたる部分はロマ 3, 21-8, 39 であり、それが信仰による義というこの手紙の主題である。このトピックに関する主要な言明はロマ 3, 21-31 に記されており、それはすぐ次の広範囲にわたって精巧に練られた議論 (ロマ 4, 1-25) へと続く⁹⁾。この章の残りの部分は、人間が行いによってではなく信仰によってのみ義とされるということの結果に関するものである (ロマ 5, 1-8, 39)。信仰による義の第一の結果は、我々が神とともに平和であるということである (ロマ 5)。次の結果は、罪による支配 (ロマ 6) でも律法による支配 (ロマ 7) でもなく、神による聖霊の力の支配下 (ロマ 8) に生きるということである。

2.3. ロマ 9-11 の構成

ロマ 9-11 の断章の集まりは、主な問題の解説で始まり (ロマ 9, 1-5)、それはこの章全体を通してのパウロによる教えの主題となっている。その問題とは、すべてのユダヤ人がイエスをメシアとして受け入れたわけではないという事実で、それが今の彼らの状況について疑問を生じさせている。次の小節 (ロマ 9, 6-29) で、パウロはイスラエルがイエスを拒絶したという事実に対する誤った評価について提示している。それはユダヤ人によるイエスの拒絶に対する正しい評価を含む、三番目の小節 (ロマ 9, 30-10, 21) へと続く。最後の小節 (ロマ 11, 1-32) は、ロマ 9, 1-5 で挙げられた

6) ロマ 1, 8-15 の構造については E. W. Deibler, *A Semantic and Structural Analysis of Romans*, p. 42. を、ロマ 15, 14-33 の構造は E. W. Deibler, *A Semantic and Structural Analysis of Romans*, pp. 344-359. を参照のこと。

7) ロマ 1, 18-32, の構造については E. W. Deibler, *A Semantic and Structural Analysis of Romans*, pp. 54-63. を、ロマ 2, 1-3, 20 の構造は E. W. Deibler, *A Semantic and Structural Analysis of Romans*, pp. 66-91. を参照のこと。

8) ロマ 9-11 は、本論において次に示す論点の主要なテーマとなるので、ここでは一般的な情報のみを提示する。

9) ロマ 3, 21-8, 39 の構造については E. W. Deibler, *A Semantic and Structural Analysis of Romans*, pp. 92-204. を参照のこと。

問題への解答が含まれており、それが最終的な栄光の賛歌（ロマ 11, 33-36）へと続いている¹⁰⁾。

2.3.1. ロマ 9-11 の内容

ここではメシアとしてのイエスへの信仰を意味する、信仰による義に関するパウロの教えの論理的帰結は、イエスを信じる必要性である。しかし、イエスが初めに福音を公布し、使徒達が伝道したユダヤ人の多くが、イエスをメシアとして受け入れなかった。神から贈られたメシアを拒否するイスラエルの民の現状について疑問が浮かび上がる。その拒絶はイスラエルがもはや神に選ばれた民族ではないということを意味するのか？ イエスの出現によって救いの歴史におけるイスラエルの役割は終わりを告げるのか？ これらの問題はロマ 9-11 においてパウロの教えの主題となる。この部分はその問題の提示で始まる（ロマ 9, 1-5）。パウロの兄弟であり、すべての約束がなされたイスラエルの民がイエスをまだ信じていないという事実は、パウロを常に悩ませていた。神の業と約束をよく知っているはずの彼らが、兄弟であるイエスを拒絶し、神の意志に背いているのである¹¹⁾。

この問題に関するパウロの教え（ロマ 9, 6-29）は事実の否定的な評価を提示することで始まる。もしイスラエル人がイエスを信じないのであれば、それはメシアに関するすべての約束が偽りであることを意味する（ロマ 9, 6）¹²⁾。この疑問に答えるために、パウロは一般的な見方（すべてのイスラエル人）を離れ、特定の見方（イスラエル出身の個人）に集中した。すべてのイスラエル人がイエスを信じるわけではないというのは真実だが、イエスを信じるイスラエル人もいるということもまた真実である。イスラエル人には二種類ある。信じる者と信じないものである（ロマ 9, 6-7）¹³⁾。本当のイスラエル人は信じる者である。イスラエルの歴史においても、ある局面では受け入れ、ある局面では拒絶するという例が多くあった（ロマ 9, 8-11）。受け入れたイスラエル人だけが神の祝福と約束の継承者となった。誰が受け入れ、誰が拒否するかは、人間の態度によって決まるのではなく、選ぶ者の自由意志による（ロマ 9, 12）¹⁴⁾。選び、憐みを示すのは、完全に自由で、絶対的で、疑いの余地のない、神の意志である（ロマ 9, 14-19）。イスラエルのある人々は信じ、ある人々は信じないという事実は、一種の神の神秘であり、人間には完全に理解することができず、またそれについて質問する権利もないことを意味する（ロマ 9, 19-21）。しかし、この種の答えは選ばれなかった人々に疑問を生じさせる（ロマ 9, 19）¹⁵⁾。答えを与える代わりに、パウロはそのような質問をする人間の権利を否定した（ロマ 9, 20-21）。パウロにとって、神の決定はすべて正しく、明確な目的のためになされる。この場合それは異邦人も神の民になることがあるということを含んでいる（ロマ 9, 23-26）。異邦人が神の民に含まれる方法は、メシアとしてのイエスを信仰することである（ロ

10) E. W. Deibler, *A Semantic and Structural Analysis of Romans*, p. 205; C. H. Dodd, *The Epistles of Paul to the Romans*, London 1944, p. 150.

11) ロマ 9, 1-5 の神学的解釈については K. Barth, *The Epistle to the Romans*, London/Oxford/New York 1968, pp. 330-339. を参照のこと。

12) ἐκπέπτω という言葉は「～の落下」あるいは「～から落ちる」を意味するが、ここでは「失敗」を意味する。J. D. G. Dunn, *Romans 9-16*, WBC, Nashville 1988, p. 538.

13) B. Byrne, *Romans*, SP, Collegeville 1996, p. 293.

14) R. H. Mounce, *An Exegetical and Theological Exposition of Holy Scripture. Romans*, Nashville 1995, pp. 198-199.

15) パウロはロマ 10, 3. 14-21 でこの疑問に答えている。

マ 9, 30)¹⁶⁾。異邦人がイスラエルと神との間でなされた契約のすべての伝統を受け入れる必要はなく、イエスの名のもとになされた、最後の、そして最も重要な契約のみを受け入れればよく、それは新しく選ばれた民として数え上げられるのに十分なのである（ロマ 9, 30-32）。イエスの名による契約を受け入れていないユダヤ人は、まだ彼らの方法を完成させていない。なぜなら、彼らはまだ神の義よりもむしろ自分達の義をより信じているからである（ロマ 10, 1-4）。彼らはすべての信頼を律法に置く。それは間違った方向ではないが、彼らはメシアであるイエスが律法の達成であることを認められず、そのため神の義に従わなかった（ロマ 10, 2）。律法の本当の目的は、人間に正しい行いをさせ、その義を証明することではなく、義をもたらす真の信仰（イエスへの信仰）に人間を導くことであった（ロマ 10, 3）。モーセは律法を守ることによる義について話しているが（レビ 18, 5）、パウロはロマ 2, 17-25 とロマ 3, 19-20 で、すべての人が律法を破ることから、律法の行いによって義とされる人は誰もいないと証明している。パウロは義が信仰によってもたらされるとしているため（ロマ 10, 6）、すべての人は心でイエスを信じて義とされ、その信仰を口で公に言い表して救われると述べている（ロマ 10, 10）。すべての人とは、すべてのユダヤ人とすべての異邦人である（ロマ 10, 12）。信じさせる行為はイエスの言葉を宣べ伝えることに先立って起こっていた（ロマ 10, 18)¹⁷⁾。イエスの言葉はユダヤ人にも異邦人にも宣べ伝えられていたが、すべての人がそれを受け入れられたわけではなかった。ここでパウロは、それを聞いていて、その知識があったにもかかわらずイエスの言葉を受け入れなかったユダヤ人に焦点を当てている（ロマ 10, 18-21）。こうしてパウロは拒絶した人々の責任に関する質問への回答を終えている。

ロマ 9, 1 で提示された問題に関するパウロの答えの最終段階はこの手紙の 11 章であり、そこでこの問題の解決策が与えられる¹⁸⁾。

2.3.2. ロマ 11 の構成

この手紙全体の議論の中心的な課題を決定するために、節または章（もしそれが個別のまとまりをなすものであれば）それぞれの構成を認識することが必要である。ローマ信徒への手紙の 11 章はロマ 9-10 章で議論された問題の解答を含んでいる。パウロがキリスト教徒とイエスを信じないユダヤ人との関係の問題について答えた主な論点は何であろうか。我々の見解では、11 章は交差配列法の構造（ABA¹）を持ち、A はロマ 11, 1-10、B はロマ 11, 11-24、A¹ はロマ 11, 25-36 である¹⁹⁾。小節 A（ロマ 11, 1-10）では、パウロは神によるイスラエルの民の排除に関する質問に答えを出している（ロマ 11, 1）。その答えは否定である（ロマ 11, 1）。神は、選ばれた民でありながらメシアであるイエスを拒否する人々もいるという事実があるにもかかわらず、イスラエルの民を退けなかった。なぜなら、イエスをメシアとして受け入れたイスラエル人もいたからである（ロマ 11, 5）。以前にも何度もあったように（王上 19, 10.14）、神はイスラエル全体を復興させるために、残る者を選んだ（ロマ 11, 5）。この神の恵みの業は自由に、そして目的をもってなされた（ロマ 11,

16) ここからパウロは、イエスを信じないイスラエル人がいるという事実に対する肯定的な評価を始める。

17) B, Byrne, *Romans*, p. 327.

18) B. Witherington III, *Paul's Letter to the Romans*, p. 264.

19) これとは異なるロマ 11 の構造については次を参照のこと。E. W. Deibler, *A Semantic and Structural Analysis of Romans*, pp. 66-91; A. J. Hultgren, *Paul's Letter to the Romans*, Grand Rapids/Cambridge 2011, pp. 396-399; D. J. Moo, *The Epistles to the Romans*, Grand Rapids/Cambridge 1996, pp. 670-672.

7)。この種の論証はメシアを拒否したイスラエルの民の運命に関する質問を生む。その質問の答えはパウロが小節 A¹ (ロマ Rom 11, 25-36) で与えており、メシアを拒否したイスラエル人がたとえ今は福音に背いていても、選ばれた民であることに変わりはないという事実を指摘している (ロマ 11, 28-29)²⁰⁾。神は彼らに憐れみを示し、イスラエルを救う (ロマ 11, 26. 30-31)。それは神に選ばれたすべての異邦人がイエスの名のもとに救いに達した後で起こる (ロマ 11, 25)。この言明は、ロマ 11 の主題である小節 B (ロマ 11, 11-24) で提示された議論に基づいた結論である。小節 B はイスラエルの民のつまずきに関する修辭的な質問で始まり、それには否定的な答えが与えられる (ロマ 11, 11)²¹⁾。イスラエル人のつまずきは決定的なものではなく、一時的なものである (ロマ 11, 15. 23)。今一部のイスラエル人が転落していることが、異邦人にイエスへの信仰によって神と契約する機会をもたらしめている (ロマ 11, 11.20.24)。栽培されたオリーブの木と野生のオリーブの木のイメージを使って、パウロは異邦人のキリスト教徒と、まだイエスをメシアとして信じていないユダヤ人との現実の関係について説明した (ロマ 11, 17-24)。

小節 B に含まれる教えがロマ 11 の主要なポイントであり、この手紙を書いた理由として最もふさわしいと思われるものの一つである。

3. ロマ 11, 1-36 の分析

構造的な分析としては、ロマ 11 は、異邦人のキリスト教徒とイスラエル人 (イエスを拒否したユダヤ人) の関係という同じ主題で、異なる局面を表わす三つの小節から成る。初めの局面 (ロマ 11, 1-10) は一部のユダヤ人がイエスを拒絶したという事実が、神がイスラエル全体を退けたことを意味しないということを示している。二つ目 (ロマ 11, 11-24) は一部のユダヤ人の失敗が異邦人の繁栄に役立っているが、それは異邦人の態度が優っていたからではないということ表わしている。三つ目の局面 (ロマ 11, 25-36) は、最後にはイスラエルが救いの恵みにあふれた地となることを表わしている。

3.1. ロマ 11, 1-10 の分析

このトピックに関する初めの局面の提示は、神がイスラエルの民を退けた (v. 1) という間違っただけの結論に関する修辭的な質問で始まるが、それはロマ 10, 20-21 に端を発するものである。その質問に対する答えは「μὴ γένοιτο - 絶対にそんなことはありません²²⁾」である。この強調された答えは、ここではイエスを信じるユダヤ人の一例であるパウロに狭められた議論に続いている²³⁾。彼はイスラエル人で、ベニヤミン族から来たアブラハムの子孫である。この三つの要素は彼がユダヤ人であることを証明している。ユダヤ人として彼はイエスを信じ、一部のユダヤ人がイエスを拒絶したためにすべてのイスラエル人が拒絶されたというのは間違いであることを証明した。

第 2 節は、神が前もって知っていた民を排除するという可能性の否定で始まる。「προγινώσκω -

20) R. H. Mounce, *An Exegetical and Theological Exposition of Holy Scripture. Romans*, p. 223.

21) L. Morris, *The Epistle to the Romans*, pp. 405-406.

22) 同じ表現がロマ 11, 11 やこの手紙のほかの場所にも表れる (ロマ 3, 4.6.31; 6, 2.15; 7, 7.13.)。

23) B. Byrne, *Romans*, p. 333.

あらかじめ知っておられる」という言葉は、神が自由に、そして無条件にイスラエルの民を選び、それはイスラエル側のどんな行いや立場ともつながりがないことを示唆している。イスラエルを選ぶという行為は、イスラエルに対する永続的な神の加護を含んでいる。その言葉は集合的な意味を持ち、残された者だけではなく全イスラエルを指している²⁴⁾。全体としてのイスラエルは、神によって退けられたが、一部のイスラエル人が神に対して忠実ではなくなったという状態は、神と神が選んだ民との関係の歴史において新しいことではない。イスラエルによる拒絶の例として神によって送られた預言者がいるが、パウロはエリヤの例を挙げている²⁵⁾。アハブ王は神の預言者を迫害し、そのことによってほとんどすべての国民を神に背かせた。エリヤの、彼とすべての民が置かれている状態に関する訴え (v. 3) に対して、神はまだ神に忠実なものを残してあるということを預言者に保証した (v. 4)。国民全体がつまずいたとき、神は残るものを選ぶ。このようにして神は、選ばれた民への永続的な加護を示している。パウロによれば、アハブ王のときに起こったことが、神の恵みの干渉によって神が再び残る者を選んでいる今 (v. 5)、再度起こっている²⁶⁾。民の選びについて、残る者の選択は神の恵みの業によるもので、選ばれた者の行いによるものではない (v. 6)。パウロや選ばれた人々は行いによって到達したのではない。なぜ神がパウロを選んだのかは謎である。パウロに関しては若いころの行いをもとに選ばれたのではないことが明らかである。彼の過去にかかわらず、むしろ悪い行いをしている時代に、パウロは選ばれた。このことは神の恵みは行いを考慮に入れないことを証明している。パウロの議論の結論は、イスラエルが求めているものを得ないのは、律法をもとに義を得ることができないためだというものである²⁷⁾。律法を絶対に犯さないとと言える者はいない。そのため、神の前で義であると訴える権利を持つ者はいない。イスラエルという言葉はすべてのユダヤ民族を指しているのではなく、イエスを拒絶した人々だけを指している (v. 7)。しかし、一部のユダヤ人はメシアとしてイエスを受け入れるために選ばれた (ἡ ἐκλογὴ - 選ばれた者)。ἡ ἐκλογὴ という言葉はたいてい異邦人を指すが、第 7 節の文脈ではイエスを信じるユダヤ人を指している。彼らは他のかたくなにされたユダヤ人の中から選ばれた (vv. 8-10)。パウロの議論の道筋は、神による全イスラエルの排除に関する間違った結論の可能性を強く否定するところから始まっており (vv. 1-4)、一部のイスラエル人が残るものとして選ばれ、そのことが全イスラエルではなく一部のユダヤ人がイエスを拒絶するということを証明するという議論に続き (vv. 5-7)、イエスを拒絶したイスラエルの現状が契約の歴史を通して神に選ばれた民の一般的な態度と変わらないという強い提言で終わっており (8-10)、それはすべてのイスラエル人が退けられるということを証明しないが、イスラエルがかたくなにされたということを証明している²⁸⁾。イエスを拒絶するように選ばれた民はどんなに神の意志に逆らっても、神によって退けられることはない。

3.2. ロマ 11, 11-24 の分析

ロマ 11, 1-10 の、イスラエル全体が神によって退けられたのではないという議論の後、パウロは、イエスをメシアとして信じないというイスラエル人の一時的な性質に関する議論である、次

24) D. J. Moo, *The Epistle to the Romans*, Grand Rapids/Cambridge 1996, pp. 674-675.

25) パウロによる王上 19, 10.14 のテキストの修正に関しては A. J. Hultgren, *Paul's Letter to the Romans*, Grand Rapids/Cambridge 2011, pp. 400-401 を参照のこと。

26) T. R. Schreiner, *Romans*, BECNT, Grand Rapids 1998, pp. 580-581.

27) E. W. Deibler, *A Semantic and Structural Analysis of Romans*, Dallas 1998, p. 257.

28) J. D. G. Dunn, *Romans 9-16*, pp. 644-650.

の段階へと進む（ロマ 11, 11-24）。この話はこの章の主題を指し示す修辭的な質問で始まる。「μὴ ἔπταισαν ἵνα πέσωσιν - 彼らがつまずいたとは倒れてしまったということなのか」と言う比喩的な一節はイエスを拒絶したユダヤ人のことを表わしている。「ἔπταισαν - 彼らがつまずいた」という言葉はイエスの拒絶という事実を指しており、「πέσωσιν - 倒れてしまった」とは、神による永続的なイスラエルの排除を指している²⁹⁾。通常目的あるいは結果を表わす接続詞 ἵνα は、この場合意味を特定するのが難しい。もしこれが目的を表わすのなら、ロマ 11, 11 でパウロはイスラエルがイエスを拒絶し神によって永遠に排除されるということが神の意志であったのかどうかを聞いていることになる。もしこれが結果を表わすのなら、イエスの拒絶が神による永続的な排除という結果を招くのかどうかを尋ねる文となる。ロマ 11, 12 の文脈では、イスラエルの完全な改宗に焦点を当てており、後者の解釈がより適切だと思われる³⁰⁾。イエスの拒絶が神による永続的なイスラエルの排除を引き起こすのかという問いに対して、パウロはロマ 11, 1 でしたのと同じように否定的な答えを与えた。イエスの拒絶が神による永続的なイスラエルの排除を引き起こすという間違った結論の可能性を否定した後、パウロは事実に関して正しい結論を与えた。正しい結論とは、イスラエル（一部のイスラエル人）によるイエスの拒絶は最終的には異邦人が神との契約に入ることができるようになるという出来事に導くというものである。異邦人がイエスへの信仰をもとにして救いを得るという事実は、一部のイエスを拒絶したイスラエル人に、彼らが律法の行いによっていまだ救いを得ていないことから、嫉妬心を起こさせる。ユダヤ人の罪と過ちが世界に、そして異邦人に大きく貢献しているという状況が、パウロをして「イスラエルの πλήρωμα が世に、そして異邦人に、より大きな富をもたらす」と言わしめた。「πλήρωμα - 完成」という言葉は、質的あるいは量的な意味にとることができる。パウロがロマ 11, 1-10 においてイスラエルの残された者に関して語った事実から、より量的な意味でこの言葉を使っているととらえたほうがよい。つまり、πλήρωμα はユダヤ人全員を指す³¹⁾。パウロは間接的に一部のユダヤ人によるイエスの拒絶が一時的で、それが目的のあるもの、あるいは異邦人にとって良い結果を生むものになることを示している。しかし、イスラエルの完成（πλήρωμα）がそれ以上のものをもたらす、世の中に貢献する時が来る。

13 節からパウロはイスラエルの一時的な転落に関する議論である次の段階に入る。メシアとしてイエスを信じるユダヤ人であるパウロは、異邦人にイエスについて宣告したが、それはまた自身の同胞に妬みを起こさせるためでもある。それが彼らのうちの何人かをイエスの信仰へと導くことになる（v. 14）。パウロは、イスラエルによるイエスの一時的な拒絶は実は、ユダヤ人ではない人々を神と和解させるための神の方法であったということを宣言している（v. 15）³²⁾。パウロはまた、ユダヤ人にイエスが受け入れられるという将来は、選ばれた民にとってもう一度新しい人生がやってくるようなものであると説得した³³⁾。この複雑な思想を説明するために、パウロは木と枝のイメー

29) 「πέσωσιν」は「倒れる」という意味だが、ロマ 11 の主要な論争上のトピックである排除の決定的な性質を明確にするために、通常「しまった」という言葉が付け加えられる。L. Moris, *The Epistle to the Romans*, Grand Rapids/Cambridge 1988, pp. 406-407.

30) A. J. Hultgren, *Paul's Letter to the Romans*, pp. 403-404.

31) D. J. Moo, *The Epistle to the Romans*, p. 689.

32) B. Byrne, *Romans*, pp. 339-340.

33) 「ἡ ἀποβολὴ αὐτῶν - 彼らの捨てられることが」というフレーズは、神によるイスラエルの排除を指すこともイスラエルによるイエスの拒絶を表わすこともできるため、この文の意味はいまいである。しかしロマ 11, 1 の文脈では、初めの解釈は否定されるべきである。また、「ἡ πρόσλημις - 彼らの受け入れられることは」というフレーズは、神

ジを使った（ロマ 11, 16-24）。ここで明らかにされた基本的な考え方は、イスラエルは聖なるものであるということである。16 節では、パウロはこの考えを示すために二つの比喻を使っている。「ἡ ἀπαρχή - 初物」が聖なるもので、「ἡ ρίζα - 根」が聖なるものであるということから、イスラエルが聖なるものということになる。どちらのイメージも神によって選ばれたイスラエル民族の祖先のことを指す³⁴⁾。イスラエルの神聖性はユダヤ人の生活によるものではなく、祖先の生き方によって築かれた基盤の上にある。17 節は、今やイエスを信じたために真の神の民（オリーブの根）となり、それによってイエスを信じないユダヤ人（折り取られた枝）より優位に立ったとみなす権利を持ったと思っている異邦人のキリスト教徒に対する序論の初めの言葉である。異邦人のキリスト教徒には誇るべき義があるが、救いの全計画の始まりである祖先の祝福を共有しているということを忘れてはならない（v. 18）。その義のゆえにユダヤ人より優位に立ったと思うべきではなく、異邦人の昇格はイエスへの信仰が基盤となっているためであり、ユダヤ人が折り取られた理由はイエスへの信仰の欠如である（vv. 19-20）。イエスを信じないユダヤ人の例は、恐れと共に神の慈しみにとどまるべき異邦人のキリスト教徒への警告となるはずであり、それが今の彼らの特権的な地位の理由なのである。しかし、その地位は神の意志による慈しみが消えれば失われ得るものである（vv. 21-22）。異邦人のイエスへの信仰をもとに、あるものは取り去り、あるものは神との契約がある選ばれた民に組み込む（v. 24）神は、今はイエスに対して不信仰だが、将来彼を信じるようになるかもしれないイスラエルの民を再び神との契約に組み込む力をも持つのである（v. 23）。

ロマ 11, 11-24 の全体の議論は、イエスへの信仰によって変化し得る一時的なものとしての現状に基づいている。

3.3. ロマ 11, 25-36 の分析

議論の最後の部分で、パウロはローマの異邦人のキリスト教徒に、ユダヤ人による一時的なイエスの拒絶に関する神の神秘を明かしている。この論証をする理由は、異邦人が神との契約に関してユダヤ人より優位に立ったと考えないようにするためである（11, 25）³⁵⁾。その神秘は一部のイスラエル人がかたくなになっている期間を指している³⁶⁾。神への不従順の時代は限られており、イエスの信仰を通してすべての異邦人が神との契約に入ればそれは終わる（ロマ 11, 25）³⁷⁾。預言者イザヤの言葉によれば、福音の公示の務めが満たされたとき、イスラエルは救われる（ロマ 11, 26）³⁸⁾。この引用はイスラエルが救われるということだけではなく、イスラエルが救われるための方法を示

によるイスラエルの受け入れか、イスラエルによるイエスの受け入れかのどちらかを指す。ここでは後者だと認識されている。A. J. Hultgren, *Paul's Letter to the Romans*, Grand Rapids/Cambridge 2011, pp. 408-409. を参照のこと。

34) W. Sanday, *The Epistles to the Romans*, New York 1902, p. 326.

35) 25 節は前置詞 *παρ* のない与格の構造であるというテキスト上の問題があり、多くの写本がこれを補っている。B. M. Metzger, *A Textual Commentary on the Greek New Testament*, Stuttgart 2002, p. 465. を参照のこと。

36) 「μυστήριον - 奥義」という言葉についてパウロがここで使っている意味は、ギリシャ語の意味ではなくむしろ聖書時代後期と聖書時代後のユダヤ教の黙示録で使われている意味と同じである。

37) すべての異邦人（*τὸ πλήρωμα τῶν ἐθνῶν*）とは、個々の異邦人すべてではなく、信じるようになる異邦人のことを指している。

38) この引用はイザ 27, 9; 59, 20-21 からなされている。新しいイスラエルではなく民族としてのイスラエルに焦点が当てられている。「すべてのイスラエル」という言葉は全ての個々のユダヤ人を指すという必然性はなく、すべての世代のイスラエル人を指している。

している。まず初めに救済者がシオンから来る。二番目にイスラエルから不信心を遠ざける。三番目にイスラエルと神との契約を結ぶ。4番目に救済者によるイスラエルと神との契約が、イスラエルの罪を許す³⁹⁾。これは全イスラエルにとっての救いの計画である。この計画はイエス・キリストによって実現される救いの計画と同様のものに見える。イスラエルの救いの計画は、イエス・キリストの救いと同じであるが、「全イスラエル」は将来のことである。しかしパウロによれば、それは神の定めによって将来実現される。とはいえ、今イスラエル人はイエス・キリストによる救済を拒絶しており、そのことはイエスへの信仰をもとに神との契約に入った異邦人の繁栄のうちに、イスラエルを神に敵対させている。彼らはイエスを拒絶したために神の敵になってはいるが、今の一時的な態度ではなく、神と契約を結んだ祖先のおかげでいまだ選ばれた民のままである（ロマ 11, 28）。祖先との神の契約は永遠だからである（ロマ 11, 29）。

最後の議論（ロマ 11, 30-32）はキリスト教徒になる前の異邦人と同じ、神を信じないユダヤ人の現状を表わしている⁴⁰⁾。異邦人はかつて神に不従順（イエスへの不信心）であったが、イエスへの信仰によって憐れみを受けた（ロマ 11, 18-32; 3, 21-30）。同様に、今神に不従順（イエスへの不信心）なユダヤ人も将来憐れみを受けるのである（Rom 11, 28. 30-31）⁴¹⁾。これは、「神のすぐ前には誰もいない」という、パウロの神学の最も重要な言明に基づいている。すなわちすべての人は神に不従順で、すべての人はイエスへの信仰による憐れみを必要としているという意味である。このようにして、パウロはロマ 1, 16 に始まった最も重要な神学的論述を終えている。

ロマ 11 は、神の富の深さと知恵の深さ、知識の深さ（ロマ 11, 33）を表わす救いの計画のために神を讃える賛歌の部分（ロマ 11, 33-36）で終わる⁴²⁾。「βάθος - 深さ」という言葉は、人間が神の本質を理解することを欠いているということを暗示し、そのことは我々に神の裁きと業を理解するという問題へと導く。イザ 40, 13 からの引用は、神は人間に何ら依存していないことを表わしている⁴³⁾。33 節の文脈では、この引用部分は、人間の期待や偏見によって神の業を強制する権利は人間には全くないことを示す。なぜなら、神は全世界の源であり、全世界の創造主であり、全世界の支

39) ここでは救済者としてキリストを指す直接的な言及はないが、ロマ 10, 10-13 の文脈で、我々の見解ではパウロはキリストを指していると解釈するべきだと考える。

40) このトピックはロマ 11 でパウロが何度も述べている（ロマ 11, 11-12. 15. 17-20. 25）。

41) ロマ 11 の議論は異邦人とユダヤ人の比較によって組み立てられている。異邦人はかつて不従順であったが、憐れみを受けた。ユダヤ人は神に不従順だが、後に憐れみを受ける。この比較は現在の状況だけを示しているのでも、最終的な目的を表わしているのでもない。31 節はテキスト上の問題を含む。重要な写本（BYZ を除く）は [vñv] ἐλεηθῶσιν の版を含み、明らかに意味を変えていることで解釈が難しくなっている。この問題の説明は B. M. Metzger, *A Textual Commentary on the Greek New Testament*, Stuttgart 2002, p. 465. を参照のこと。

42) この賛歌の部分はロマ 9-11 だけでなく、ロマ 1, 16-11, 33 の結論である。これはロマ 9-11 が初めからここまでは通して不可欠な部分であることを表わしている。33 節の賛歌の部分は神の 3 つの特質（寛大、知恵、知識）を含み、34-35 節は 3 つの特質を逆順に尋ねる修辭的な質問（「だれが主のみこころを知ったのですか」は神の知識を指し、「だれが主のご計画にあずかったのですか」は神の知恵を指し、「だれが、まず主に与えて報いを受けるのですか」は神の寛大を指す）からなる。また栄光の賛歌（v. 36）においてこの 3 つの句はすべて神のことを表わしている。

43) 34 節に見られる引用「だれが主のみこころを知ったのですか。また、だれが主のご計画にあずかったのですか」はイザ 41, 3a の LXX 版から引かれた。同じテキストをパウロは 1 コリ 2, 16 でも引用している。35 節の引用「また、だれが、まず主に与えて報いを受けるのですか」は聖書の LXX 版ではなく、むしろヘブライ語の聖書から引き、ヨブ 41, 3a を広げて反映させている。

配者だからである（ロマ 11, 36）。

4. ロマ 11 の社会的、神学的帰結

本論の序章で提示した構成の分析（ポイント 1）では、この手紙を書く理由がローマの共同体を訪れたいという希望の通達をはるかに超えていることを示した。この手紙の大半を占める部分（ロマ 1, 16-11, 36）は厳格に教義的な性質を持ち、そしてそれはクラウディウスの法令が廃止になった後という共同体の社会的状況で根付いていき、異邦人とユダヤ人から成るキリスト教徒と、イエスを信じないユダヤ人の共同体との新しい関係を築かせた。このことはイエスを信じるユダヤ人とイエスを信じないユダヤ人から成るユダヤ人の共同体だけでなく、ユダヤ人と異邦人から成る都市の社会にも関係する⁴⁴⁾。ユダヤ人が都市に戻ることを許された後、異邦人のキリスト教徒とユダヤ人（おそらくはキリスト教徒のユダヤ人とユダヤ教徒の両方であると思われる）の間の疑いと敵意の問題がキリスト教徒の共同体の難しい問題となった。手紙の教義的な部分は仮説を確認しているように見える。初めの部分（ロマ 1, 18-3, 20）は、すべての人は罪人で、神の前には誰もいないということを考えに入れている。このトピックはユダヤ人的な視点から提示されており、主な問題は、律法への従順をもとに神の前に彼ら自身を置くことはできないということをユダヤ人に納得させることである⁴⁵⁾。神の前に誰もいることができないことを証明した後、パウロは人間が義として数え上げられる方法を提示している。この話題はロマ 3, 21-8, 39 の論議の主題であり、ここでの主要なポイントは信仰による義である。義とされる方法はイエスを信じるすべての人に開かれている。この種の教えはイエスを信じていないユダヤ人の状況に関する問題を生み出す。その問題がロマ 9-11 トピックであり、パウロによって弁解調で提示される議論である。パウロはイエスを信じていないユダヤ人のために謝罪をし、異邦人のキリスト教徒の読者にそれを与えた。パウロがこの手紙

44) クラウディウスの法令のもとに、おそらく AD 49-53 と考えられる期間にすべてのユダヤ人がローマから追放された。この出来事はローマの歴史家スエトニウス（AD 69-AD 122）やカッシウス・ディオ（AD 150-235）と同様に、使徒言行録（18:2）でルカによって言及されている。この出来事の日付は討論や論争の種となっている。同じことが法令の理由についても言える。スエトニウスは *Divus Claudius* 25 の中で「ユダヤ人は *Chrestus* の扇動で続けて騒動を起こしたので、彼〔皇帝クラウディウス〕はローマから彼らを追放した」と書いており、これは追放の理由として宗教的扇動（その前に起こった BC 139 と AD 19 の、ローマからのユダヤ人追放の理由と同じ）を提案している。しかし、カッシウス・ディオは『ローマの歴史』に次のように書いている。「ユダヤ人に関しては、再び非常に増大しているので、その群衆を理由に都市〔ローマ〕から彼らを除外するために騒動を起こすことなしには困難な状態で、彼〔クラウディウス〕は彼らを追い出しはしなかったが、伝統的な生活習慣を継続する一方で集会を開かないように命じた。」これはユダヤ人がローマを離れた理由がクラウディウスの側からの宗教的迫害であったことを提案している。もしスエトニウスがキリストのことを *Chrestus* と書き、カッシウス・ディオが集会を持つことの禁止をシナゴークでの祈りについて書いていたとしたら、ユダヤ人による妨害はユダヤ人とキリスト教徒のユダヤ人から成るユダヤ人の共同体内のイエス・キリストに関する論争を指している可能性が高い。

45) ユダヤ人の罪深さに関する議論は広範囲にわたってなされている議論の主題である（ロマ 12, 1-3, 20）。異邦人が罪人だというユダヤ人の信念が一般的なため、異邦人の罪深さに関する議論はずっと短い（ロマ 1, 18-36）。我々の意見では、異邦人の罪深さに関する断章はパウロの見解を表わしているのではなく、異邦人に対するユダヤ人の評価の典型を明示していると考えられる。

を書いたとき、ローマの社会はその都市において大きな騒動を起こしていたユダヤ人に対してあまり好ましい扱いをしていなかった。こうしたユダヤ人に対する一般的な態度はキリスト教徒の共同体にも影響を与えていたに違いなく、そこにはイエスを信じないユダヤ人に対する反感があった。このことが異邦人のキリスト教徒に、社会的、宗教的なレベルでユダヤ人に対する拒否反応を起こさせた (Rom 11, 25)。パウロの謝罪の目的は、社会的なレベルでのキリスト教徒とユダヤ人の間の極端な対立を防止することであった。

ロマ 9-11に見られる教えは重要な神学的、宗教的帰結を含んでいる。それはキリスト教とユダヤ教との長く難しい関係の中でしばしば見過ごされてきたことである。メシアとしてのイエスを受け入れないユダヤ人がいるという事実は、パウロの悲しみであり苦しみである (ロマ 9, 2)。しかし、彼はそれをイスラエルの終わりとは見ていない。その理由の一つ目は、イエスをメシアとして受け入れたイスラエル人もいたことである (ロマ 11, 1)。二つ目は、一部のユダヤ人によるイエスの拒絶は神がイスラエルを排除するということを意味しないからである (ロマ 11, 2)。三つ目はその一時的な状態はいつか変わるということ (ロマ 11, 25-26)。4つ目は、イスラエルの現在の不利な立場は神の救いの計画の一部であるということ (ロマ 11, 30-31)、それによれば、異邦人に救いのチャンスを与えるために、イスラエル (一部のイスラエル人) はこの少しの間救いの可能性から除外されているのである。しかし、異邦人の救いの計画が完成したとき、イエスをまだ受け入れていないイスラエル人もまた救われる (ロマ 11, 17-24)。4番目の理由はイスラエルと新しいイスラエル (キリスト教徒) の関係に対するパウロの見解を理解する上で非常に重要である。イスラエルは新しいイスラエルより先に興り、その特権はいまだ有効である (ロマ 9, 4)。新しいイスラエルは神の救いの計画を共有しており、それはイスラエルの中で実現された (ロマ 9, 5)。神が新しいイスラエルを作ったということは、イスラエルが排除され、もはや神の救いの計画にも入っていないということを意味するものではない。パウロの強い信念は、神の救いの計画が、イスラエルと同様に、新しいイスラエルへの憐れみも含んでいるということである (ロマ 11, 32)。パウロの、ユダヤ人に対する謝罪の最終節 (v. 32) はこの手紙の最も重要な言明である：イエス・キリストを信じる信仰による神の義であって、それはすべての信じる人に与えられ、何の差別もありません (ロマ 3, 22)。

結論

この手紙の内容は、ローマの共同体を訪問する計画を丁寧に知らせるという理由をはるかに超えて書かれている。教義的な部分 (ロマ Rom 1, 16-11, 36) の主な教えは、信仰による義に関するものであり (ロマ 3, 21-4, 25)、ここでは律法による救いに関する確信に異議を唱えている (ロマ 3, 28)。教えそのものとすべてのユダヤ人がイエスをメシアとして受け入れていないという事実は、イスラエルと新しいイスラエルとの関係に社会的、神学的問題を生じさせる。ユダヤ人のためのパウロの謝罪は、社会的なレベルで二つのグループ間の徹底的な両極化を起こさせるべきではないということを示唆している。このグループ間の関係の神学的なレベルに関しては、パウロは両グループとも神の憐れみを必要としていることを強調している。異邦人が憐れみを受け、ユダヤ人がいまだ憐れみを受けていないということは、新しいイスラエルがイスラエルより優位に立っているということの意味しない。なぜなら、イスラエルの一時的なつまずきは神の救いの計画の一部だからで

ある。